

『天文愛好者』 vs 『天文素人』 その永遠の対立について

○比嘉義裕（ひが企画）、富田朝木（ひが企画）

われわれ『天文愛好者』は、「星が嫌いな人なんて存在しない」と思っているふしがある。

たしかに「星なんて、見るのも聞くのも考えるのも大っ嫌い！」と公言する人に、私は出会ったことがない。

しかし、この世の中、“嫌いじゃない”＝“好き”、ではない、という事実を忘れてはならない。

本発表では、“星を嫌いじゃない人”のことを、『天文素人』と呼ぶことにする。

天文を尺度にした人口比率は『天文愛好者』：『天文初心者』：『天文素人』＝1：10：1000、といった感じではないだろうか。でなければ、日本全国でこれだけ星空観望会がおこなわれているのに、「生まれて初めて望遠鏡を覗きました」という人が、後から後から現れる理由が、説明できない。

具体的に、『天文素人』の人物像を挙げてみる。

★「星はキライじゃない」と言う。

★天文に対して、日頃は特に関心がない。

→「へ～今日って皆既日食なんだ～。それで？」みたいな。

→占いは好き。でも「わたし、さそり座だけど、見たことな～い」みたいな。

★ただボ～ッと星を見ているだけで充分。

→たまに、窓辺から見える月で満足満足！（写真なんてせいぜいスマホ）

→でも満天の星空を見て、思わず「うわ～キモチワルイ！」と言ってしまうみたいな。

★宇宙とか天文とか、壮大すぎてわけわからないし、望遠鏡って怖い。

★天文好き＝根暗、と信じている（かも）。

本発表では、『天文愛好者』と『天文素人』との間に横たわる、深くて幅広くて速い川を、どうやったら渡れるのか、星空観望会を例にとって考えることとする。

不幸な事例を2つ挙げる（若干のフィクション盛り込み済み）。

不幸な事例その1：街角観望会

『天文愛好者』が、通りがかりの人を呼びとめ、星を見ていただいている。相手は『天文素人』だった。

「すばる、入ってますよ～見ませんか？」

「わ～きれい！星がいっぱい見える！」

『天文愛好者』は、好感触な返事に喜び、気合を入れて「すばるは、六つの連なる星と書いて“むつらぼし”とも呼ぶんですよ！ちなみに、“すばる”は“統べる（束ねること）”が語源と言われています。ギリシャ神話では女神アルテミス……あ、これは月の神様ね……に仕える7姉妹たちで～…」と、怒涛の説明をしてしまう。『天文愛好者』の、なんと残念な性であろう！さらに、『天文素人』が黙っているのをいいことに、あろうことか望遠鏡自慢まで！

しかも、辺りが暗いから『天文素人』のしかめっ面が見えないことが、さらに痛い。

不幸な事例その2：天文施設の星空観望会

土星が見ごろと、インターネットで見かけたので、勇気を出して友達と天文施設に出かけた『天文素人』。

『天文ボランティア』が、望遠鏡で土星を見せていたので、恐る恐る近づき、覗いてみた。すると、事細かに土星の解説が始まった。

（ただ、土星の輪っかが見たただけなのに、専門用語を連発されてもチンプンカンプンよ～！）と思ってはいるものの、一生懸命に話してくるので、そんなに気のない素振りもできず、「へ～なるほど～」などと言ってしまったものだから、さあ大変！さらに延々と説明が！もはや説明が止まるまで逃げられないと、覚悟を決めた。

このような事例は、枚挙に暇がない。

みなさんも、見聞きしたり、あるいは自身が加害者になったことがあるだろう。

もし「このような例には出会ったことがない」とおっしゃるツワモノがいたとしたら、それは残念ながら、見えるはずのモノが見えていないと断言せざるを得ない。

では、このような不幸を回避するために、われわれ『天文愛好者』は、どのようなことに考えを及ばせればよいのだろうか？

天文知識やうんちくは、『天文素人』にとって、しばしば苦痛で迷惑である。そして、天文知識やうんちくが迷惑がられていることを『天文愛好者』が気付いていない場合は、より恐ろしい。

「いろいろ解説してもらってもね～」

「だからなんなの？みたいな」

「一生懸命に解説してくれているんだから、ちょっとは興味あるフリしてあげようかな」

などと、上の空、もしくは逆に気を使ってもらってしまう現実。双方ともなんて不幸なんだろう。

こんなことを繰り返していたら、双方を隔てる川は、一生渡れないだろう。

ここで忘れがちなことがある。世の中には、理論・理屈ではなく、直感・感性を、優先的な判断基準にしている人が、たくさんいるということだ。そして私が知る限り、『天文愛好者』は理論・理屈が大好きである（勘違いされては困るのだが、『天文素人』は直感・感性で生きている、という意味ではないし、『天文愛好者』の中にも直感・感性を大事にしている人は、少なくない）。理論・理屈の塊のような『天文愛好者』と、直感・感性の申し子のような『天文素人』が出会った場合、双方が大不幸になることは間違いないだろう。

『天文愛好者』、特に理論・理屈が好きな、あるいはそういう話し方を自覚している、あるいはそういう話し方だと指摘された者は、星空観望会で『天文素人』がなにを望んでいるのか、確実に見極める必要がある。

★天体の説明を求めている → 天文学“的”な解説

★会話を求めている → 哲学“的”な問答（「星なんか見てて役に立つの？」「空はどこから空なの？」など）

★ただ見たいだけ（“見た”という行為そのものに満足している） → 言葉はいらない（かも）

いずれにしても、“独りよがりの、話したがり”はダメダメである。『天文素人』がなにを求めているのか、つまり人間観察力が重要なのである。

『天文愛好者』のみなさん！言い過ぎかもしれないけれど、天文知識よりも人間力を磨きましょう！

じゃないと、『天文素人』との距離は、未来永劫縮まりませんよ！

（本発表は2014年6月28日の『「第6回星空案内人の集い」＆「第4回JAAAミーティング2014」』での発表を元に作成された。）

追記1) 本発表に対する意見からの抜粋

★ハッとした。自分もそうしているかもしれない。反省します。(50代男性)

★私は、家の窓から月を見えています。スマホで月を撮影して満足しているし、しかも望遠鏡が怖いので、まさしく『天文素人』です！(30代女性)

★ほとんど見えていない星雲を見せて「かすかに見えるだろ、感動するだろ」とか強要する人を見て、ゲンナリしています。(40代男性)

追記2) これまで書いてきたことを読み返して、ふと思ったこと

とある合唱祭で、エンディングで『大地讃頌(だいちさんしょう)』を、参加者全員400名で歌った。会場客席に散らばる歌手は、各々のパートを自由に歌っていた。その圧倒的な音圧に、心から感動し、思わず涙が出た。

しかし、歌手のみんなは、ニコニコしながらパフォーマンスを楽々と、こなしていた。

なぜ彼らは、感涙しないのだろうか？

たしかに歌手たちは、どんな素晴らしい楽曲だとはいえ、歌うたびにいちいち泣いていては、歌声を観衆に届けることはできない。これはつまり、自分たちのパフォーマンスに“鈍感”(あるいは感情を“封印”?)になっているからなのではないか？(本当のところはわかりません。)

振り返って我が身にあてはめて考えてみる。

われわれ『天文愛好者』は、淡々と天文普及活動をおこなっていないだろうか？星空観望会に集まった人を捌くことばかりに気を取られていないだろうか？早くビール飲みたいなぁと考えてはいないだろうか？

初めて天の川を見た感動、初めて望遠鏡で月を覗いたときの感動を、常に持ち合わせながら、『天文素人』に接しているだろうか？

自分が感動せずして、どうして星のすばらしさを、人に伝えられるのだろうか！

追記3) 天文教育普及研究会年会@東京学芸大で発表したときの反響と、質疑応答

ほぼ同じ内容で、『「第6回星空案内人の集い」&「第4回JAAAミーティング2014」』にて話したのだが、“受けるポイント”が違った。

前者の参加者のほとんどは、アマチュアの『天文愛好者』であった。彼らは望遠鏡など機材を持っていて、地域の天文サークルに所属しているものも多く、星空観望会などへの参加経験も少なくない。つまり『天文普及』に関わっているのである。それらの経験が、“しつこい天体説明”や“観望客に気を使わせてしまっているかも”という部分で、大受けした。

一方、天教年会の参加者の過半数（もっと多く8割くらいか？）は、『天文教育』の人たち（小・中・高校の教員であり、天文を理科・地学の教科として“教えなければならない”立場）である。なので、上記ポイントでは、受けないどころか、“？マーク”を頭の上に浮かべている人も少なくなかったようだ。代わりに、“初めて星空に触れたときの感動を持ち合わせているか？”の部分に、強く反応していた。

『天文普及』と『天文教育』は、かくも異なるというわけである。

天教年会にて本発表後、『天文愛好者』と『天文素人』の比率について質問や意見をいただいた。再考すると、ここで挙げたもう一つの『天文初心者』は、少なくとも“天文が好き”なので、区分は『天文愛好者』寄りである。このように解釈すると、『天文愛好者』と“天文が嫌いではない”『天文素人』との比率は、11：1000となる。

天教年会にて本発表後、会場から「音楽家は、乗っても良いが酔うな、と指導される」という意見をいただいた。なるほど納得である。

一方、ネットからは「星も好きで音楽活動もしているが、舞台上で感極まって泣いてしまうのは歌を届けられないので困るけど、さりとて感情を封印するのもなぁと考えてしまう。感動をいつも心の片隅に！」とのコメントがあった。

本発表で出てくる“星空案内人”は、資格認定制度のそれとはなんら関わりがない。この言葉が商標登録化される前から、『星空案内人の集い』の中心メンバーは、この言葉を馴染みあるものとして使用しており、もちろん商標権を持つ山形大学のガイドラインにも一切抵触するものではない。